

ME she の発生と伝播

東 保 憲

—

元来 *コー* で表されていた英語の三人称単数女性代名詞の変化形のうち、とくに主格だけが *she* に変わったのは、OE 末期から ME 初期にかけてのことであるが、*h* と *s* の交替は英語では他にほとんど例のない変異のように思われることから、長いあいだ英語史の研究者たちを困惑させてきた。文献が非常に乏しく、わずかに残存するものも、方言の特定が困難な時代にこのような変化が起こったのであるから、その変化のプロセスを明確な証拠をあげて説明するのはきわめてむづかしい。前世紀以来多くの推測がなされ説明が試みられたが、決め手となるものは現れず今日に至っている。

近年の言語史研究が一定の言語理論にとらわれ自らの視野をせばめて、歴史の現実から遠ざかる傾向もあるように思うので、本稿ではこの問題を言語内部の問題としてばかりでなく、歴史、方言、借用等、むしろ言語外部の要因も取り上げて、なるだけ総合的に考察し、筆者なりの判断を下したい。

従来の諸説を知るには、Wright: *An Elementary Middle English Grammar* (1928), Wyld: *A Short History of English* (1927) のような参考書のほかに、辞書としては Skeat: *Etymological Dictionary of the English Language* (1910) と *Oxford English Dictionary* (1933) をあけることができよう。右の四書は she の起源についての考え方が基本的には一致している。すなわち、OE の指示代名詞・定冠詞女性形 *seo* の変形とする見解をとっている。OED は一九三〇年代の初めごろまでに現れた説の大部分に言及しているが、独自の立場はやはり *seo* 説なのである。

以上の標準書のほかに、今世紀の初頭以来とぎおり重要な論文が発表されている。G. T. Flom (1908), H. Lindqvist (1921), Eugen Diehl (1955), Vachek (1960), R. D. Stevick (1964), M. L. Samuels (1965) 等の論文が主なものと言えるであろう。Lindqvist のものを除けば、これらの論文はすべてが前記の四書と違い、she が OE の人称代名詞女性形 *heo* (*hie*) に由来すると考える点で共通している。しかし she の研究の最新の到達点として、Stevick の論文と Samuels の論文が最も重要なものである。Stevick の論文について、わが国では荒木一雄氏が「英語青年」(一九七〇) 誌上で紹介し、ある程度批評も加えられたが、短かすぎて十分とは言えない。本稿ではこの二つの論文の主旨を要約し、それを吟味しながら論を進めることとするが、その前に今世紀前半の諸説の内容を個条的に整理して参考にしよう。

ME she の発生あるいは発達についての従来の諸説はだいたいの次のようなものである。

(イ) ON の指示代名詞 *sta* が OE 末期に借用され、*scæ* になったとする説。これはあまり単純というわけか、支持者はほとんどない。

(ロ) OE の指示代名詞・定冠詞の女性形 *seo* (*sio*) が自然に変化して ME に *scho*, *sche* などが生じたとす

る説。

- (イ) 本来の女性代名詞 *heo* (*hio*) と *seo* (*sio*) が混交して「s」が生じたとする説。
- (ニ) 当時 ON の二重母音の一部に stress の移動が起こり、下降 (falling) が上昇 (rising) に変わったが、それが英語にも影響して *seo* (*sio*), *heo* (*hio*) が生じ、「s」音への道を開いたとするもの。
- (ホ) *seo* に関係なく、*heo* > *heo* > [hjo] > [çó] のような連鎖的変化の結果「s」の語頭子音が生じたとするもの。
- (ク) 北部地方に起こった三人称単数現在動詞の「s」と *heo* の「h」のあいだに (e.g. comes *hæo*) 連聲 (sandhi) 現象が起こって「s」音が生じたとする説。

二

Stevick の *The Morphemic Evolution of Middle English she* は、上記のどの説からも十分に納得のいく説明は得られないとし、/h-/ > /s-/ の途中経過のあいまいさを構造言語学の立場から除去しようとする。綿密で周到な論文なので、十分に評価するためには全文を引用しなければならぬであろうが、ここではとくに重要と思われる部分だけを要約した形で紹介することにします。

Samuels の論文は、ある方言に生じた形態の変化が他の方言に伝播する途中で、機能的選択が繰り返されることを述べたものであるが、本稿に関係のある部分の要旨を書きとめておこう。

Stevick の論文の要点をだいたいパラグラフごとにまとめてみると、次のようになる。

(イ) 語頭に /s/ を持つ新しい代名詞は、OE *séo* の変形でも *séo* と *heo* の混交 (blending) でもないことは、*Peterborough Chronicle* の長年にわたつてとぎれることなく書き継がれた記録から明らかである。P. *Chronicle* の *scæ* と *Ormulum* の *3 ho* その他の形が初めて用いられるよりもだいぶ前に、*séo* は廃語になっていくことがわかるからである。*séo* よりむしろ、この変化が起こるころまで用いられていた *heo* (*hie*) から [ç-], [s-] が生じたと考えるべきである。

(ロ) ON に上昇二重母音が起こり、それが OE にも影響して *heo* > *heo*, *hie* > *hié* となつて [hɪ-], [ç-] > [s-] の原因になったとする説には疑問がある。ON で二重母音に上昇化の傾向が生じるのは、英語に *she* の原形の生じた後ではないかとも考えられるからである。

(ハ) [h-] > [hɪ-] > [ç-], [s-] という連鎖は説得力を持っているが、これが成立するためには北歐人が彼らの女性代名詞 *hón* を捨てて英語の *heo* (*hie*) を借用し、それが北歐語の中に定着して [ç-] の発音に落ち着き、英国人の耳にはそれが [ç-] に聞こえた、という複雑な社会言語学的な事象の連鎖が想定されなければならない。このようなまわりくどい経路は簡単に信じられるものではない。

(ニ) 小数の地名等に [h] > [s] の痕跡が見られることから唱えられた **Sheland* * 説も十分説得力があるとは言えない。偶然に孤立して起こる一段変化 (one-step process) と、使用頻度の高い人称代名詞の多段変化 (multi-step process) を同日に論じることができない。

もう一つの説明法である *sandhi* (連聲) 説も、生起例の少い語配列を抛りどころとしており、不確かな二重母音の上昇化を前提としているのであるから、あまり信頼できない。

(ホ) より自然な説明法を得るためには、当時の英語の構造的な特徴に着目しなければならない。女性代名詞は、

孤立した地名などのような辞書項目とは違って、人称代名詞の変化表 (paradigm) という閉鎖的な体系の一部分である。一人称、二人称、三人称の単数はそれぞれ /*ɪ*-, /*θ*-, /*h*- という語頭屈折で表されている。このような構造的制限のもとでの /*ɔ*-/ > /*s*- の変化であるから、その説明は「目立たない変化」の原則に沿ってなされなければならない。このばあい、使用頻度が高いことと、人称代名詞の体系がそれを要求している。

ㄷ he, se などの綴字は、[*s*] になる前に [*ɔ*] の段階があったことの証拠である。しかし [*ɔ*] が英国人の耳に [*s*] に聞こえたという説明は十分でない。音素論の立場から厳密に解明しなければ説明が改良されたとは言えない。

人称代名詞の語頭屈折は根強いもので、時代とともに衰えるようなことはなかった。三人称単数を表す /*h*- もそうであった。/ *h* / は語頭における音結合 (cluster) の仕方が摩擦音 /*fθs*- と似ているが、母音の後には生じない点が違う。一方、/ *x* / は音価は /*h* / に近いが、分布的には母音の後には生じない。音価と分布の両面で近似する他の音素がないので、/ *h* / には多くの異音が許される。聲門音としても軟口蓋音としても硬口蓋音としても調音される。三人称代名詞の /*h*- 構造に硬口蓋音「*ç*-」が用いられても、とくに異常なものとは感じられなかった。

(ト) 一方、北欧人の密集地 (ヨークシャー、リンカンシャー) 一帯では *sk*- を持つ北欧語の単語が数多く英語の語いの中に入り込み、この地方の英語の音素構造に混乱が起った。英語では OE の初期に /*sk*/ は /*s*/ に変わり、その点で OE と ON は全く違っていた。従って初期の /*sp*- *st*- *sk*- /、/ *spr*- *str*- *sk*- / という語頭子音結合の類群も /*sp*- *st*- *s*/、/ *spr*- *str*- *st*- / に変わってしまったわけであるが、北

欧語が大量に借用されたとき古い /sk-/、/skr-/ が戻ってきて、二元の類群が復活したので、/s-/、/skr-/ はそれまで属していた類群を離れ、新に（母音前位では）/fθs/, /fr-θr- /とそれぞれ類群をなすことになった。つまり連接の後・母音の前の /s-/ は分布上もはっきりと摩擦音の仲間に入ったわけである。従って、この地方の方言では、/c/ が /h/ の異音から /s-/ の異音に移ることが、他の時期よりも目立たぬように起こりえたのである。

こういう見方をするとき、/r-/ < /s-/ は借用とか類推による変化というより、異音レヴェルでの変化と考えるほうが理解しやすいし、当時のいろいろな状況とも矛盾するところがない。

(フ) この変化の原因は当時の英語の形態論的な面にも求めることができよう。人称代名詞表の枠 (frame) は OE 末、ME 初期において、性と数の別は従来どおりであるが、格の区別では変化が起っていた。対格と与格の合一が進行中であつた。しかし人称代名詞の文法性は指示物の自然の性別を指すか、性別とは関係がないことを指すかのいずれかで、OE の定冠詞 *se, seo, ðæt* の選択が文法だけで決定されたのと違って、本来重要な示差機能を有したのであるから、形態の差も不可欠なものであつた。さらに数、人称は発話のコンテキスト、発話の様式と、機能的関係にあつた。このような示差のための構造の強固さが、ME *she* 発生の窮極的な原因であつたように思われる。

(リ) 女性単数形と複数形との同音化から起る混乱を避けるために *she* が発達したという見方もあるが、それは違う。抽象的な変化表を見て感じるほど実際には混乱は起こらなかった。たとえ *heo, he* が方言によって三人称複数形と同一であっても、動詞の形によって区別はつけられる。与格には /r(e) と /θ の別があり属格は /o: と /e: で単複が区別されるといったぐあいだ、その他さまざまな示差的特徴が文脈上に表れる

から、主格単数と複数の同音化からくる混乱は少なかったと思われる。またこのことは、*eo* 形が長い間続いた事実からも、この両形が *eo* 形から離れてゆくのが全く無関係な出来事であったことからわかる。すなわち *h- / < / s- / : / h- / > / e- /* (内部音韻変化対外部からの借用) という全く異質の変化なのである。複数が *eo* へに変わる必然的理由もなかった。複数代名詞の語尾 *-eo* *-eo* *-eo* は英語でも北欧語でも同じであった。おそらく *eo* が導入されたのは、当時名詞類に複数形態素 (*-es*) が発達する強い傾向があったのと関係がありそうである。

- (又) */s- /* の発達は性 (gender) の対立の根強さを示している。女性代名詞は多くの方言で */he.o /* が最も普通の形であったが、Mercia, Northumbria 方言では */hi.o hi.w hi.e /* も多かった。この */i /* が */h /* の異音「*ç*」の発達の好条件になったと思われる。(he-) と (he.o) の対立は明りょうであったが、やがて Anglia 方言 Wessex 方言などで */e.o / < / e. / > / e. /* となり両者の対立がぼやけてしまった。それでも「*h*」が「*ç*」に近づく条件は残っていたらしい。一一—一四世紀の西中部、東中部地方の方言に (so.), (se.) の両方が発達した事実からもそれがわかる。右記のように女性代名詞の */e.o /* が */e. /* になると、男性代名詞の */e- /* との対立が弱まり、いくつかの方言ではほとんど区別がつかなくなった。そうになると、二つの代名詞を区別するには子音の部分 (segment) に差をつけるか母音の部分に差をつけるか、*sho* のようにその両方を併用するしかない。Peterborough Chronicle の終わりのほうで *he, sce, (pl)E* が現れるのは、そういう理由からであろう。また口語ではこれらの代名詞は弱強勢で用いられることが多いから示差力の強い異音が選択される傾向になるであろう。いったん */s- /* が確立されると *she, sho* の *ç* は *he, dei / ðes* などの語尾との類推から *she* のほうが優勢になることも考えられる。

M. L. Samuels はエディンバラ大学で、いわゆる Fit Theory (はめ込み法) の提唱者 Angus McIntosh 教授の共働者として、新しい ME 方言論を展開している。Stevick の論文の一年後に発表された彼の論文では、Stevick が全く予想しなかったようなアプローチが示されている。注(1)にあげた題名からわかるように、より大きな主題の中の一例として she の伝播のことが述べられているので、その部分の主旨を要約してみる。

(イ) 言語は言連鎖 (Spoken Chain) と体系 (System) の両面から見ることができる。言連鎖とは、一つの言語社会で限られた期間内になされた発話の総体を指し、あらゆる言語現象、いわば言語の未分化の混沌状態を包摂する部門である。意味のわからないことも含まれる。それに対して体系とは、同一社会、同一期間内、対立関係によって確立された公認の規準の総体であって、意味のわからないことは含まない。

言連鎖で生起するいろいろな変化の中から機能的に選択されたものが体系に組み入れられ、体系が確立すると考えてよい。

(ロ) she の発生と伝播の問題もその一例としてあげることができる。はじめにカムバランド、ヨークシャーを結ぶ地帯のどこかで /h/ / \sqrt /s/ が起こり、その中間段階の「ç」は際辺的 (marginal) な音素 (綴字は ç, çh) となつてしばらく残るが、やがてより完成した音素 /s/ と交替する。その模様は各地の写本の年代と綴字を照合することによって知ることができる。sh- の前線が南あるいは西へ進み heo (hie) が後退するにつれて、sh- の中間帯が生じては消える。

前章で要約した Stevick の論文は一見非常に精密なようであるが、よく考えてみるとかならずしもそうでないところがある。言語史の問題を論じるばあいには、いかに数量的にわずかな資料でも、それを不当に軽視するのは許されないであろう。自己の立論に合わないことでも、それが文献に明記されていたり、史実として広く認められていることはもちろん、たんなる蓋然性であっても、相当に根拠のあるものなら無視するわけにはいかない。また、言語史の問題はすべてが幾何学のように証明されるとは限らないと思う。物証にせよ心証にせよ、わずかの証拠でも、公平に常識的に扱って判断を下すのが言語史の正しい態度であろう。

Stevick は上掲の要約の (ホ) 以下で構造主義の立場に立って ME she の発達を説明しようとしたのであるが、その部分に力を注ぐあまり、(イ) (ウ) では従来の考え方を軽視しすぎてはいないかと思う。以下彼の説について筆者が疑問に思う点をいくつか取り上げて論じてみよう。 Sannels の論文についても気づいた点を述べておこう。

Stevick は (イ) の部分で「*scæ* や *ʒho* (Orn) その他の形態が用いられるようになる前に、*seo* は廃語化していた」と述べているが、これはかなり独断的であると言いたい。 *P. Chronicle* で *scæ* が出るのは最後から二番目の年誌 (entry) で、A. D. 1140 の出来事を記載した部分であるのに対して、*seo* が最後に現れるのは 1119, 1120, 1121, 1122 の年誌にそれぞれ一回ずつである。この *Chronicle* の写本は五人の筆蹟で書かれているというのは定説であるが、たまたま第一の筆蹟は 1121 で終わっているから、*seo* が最後に用いられるのは第一筆蹟の終わりから第二筆蹟の始めにかけてということができると筆者が違えは作者が違くと断定することはできないが、このばあい、1122 の年誌以後 OE の文法が目立って衰えることからしても、これを境に作者が交代したのは明白である。少なくとも当時の文筆家二人が *seo* を使っていた証拠になる。ともあれ、このような状況で *seo* が続けさまに四回出るといえるのは、*scæ* の初出より少なくとも二〇年 (たぶんそれ以内) 前までは *seo*

が用いられていて、消滅寸前の状態ではなかったと言えそうである。もっとも *seo* の用法は、1121 で女性人称代名詞（または関係代名詞）として正しく用いられているほかは、*seo cyng*, *seo arce* *biscop* のように男性名詞に定冠詞の女性形をつけた ‘*corrupt*’ な用法ではあるが、*seo* の形態が健在であった証拠とすることはできよう。

なおまた当時の言語の状況を考えると、標準語という体系が存在しなかったのはもちろん、地域ごとの小体系（*sub-system*）も不安定なものであったことが想像できる。*P. Chronicle* の 1140 年誌に *scæ* が初めて登場したからといって、その数年前にこの形態が発生したなどと考えるのは全くの早計であろう。不幸にして記録されなかった方言では、*ʒæ* またはそれに近い形が何十年も前からいわゆる言連鎖の中で使われていたことは十分考えられるのである。*Stevick* が *she* の原形が現れるころ *seo* が廃語化していたと言うのは、根拠薄弱だと思ふのである。

Stevick は英語の音韻に北欧語が及ぼした影響が少なかったことを示すために、*Gordon* から種々の引用をしている。*Gordon* の原書⁵⁾に照らしてその引用部分の要点をまとめてみる。

- (イ) *ON* の二重母音に強勢の推移（*stress shift*）が起ったのはだいたい八五〇—一〇〇〇年の間で、一部はこれよりもさらに遅れて起った。最初に推移が起ったのは語頭の二重母音であった（\$48）
- (ロ) 東中部には八七六—九〇〇ごろ、北西諸州とヨークシャーには九〇〇—九五〇ごろ北歐人が定住したが（\$228）、*OE* 期のあいだは *ON* と *OE* の混交はほとんど見られなかった（\$230）
- (ハ) 八七五—九五〇年のころ *ON* が英国に移入されてから、主に一〇五〇—一二〇〇年ごろ借用語として英語に取り入れられる時まで、英国における *ON* の音韻にはほとんど変化がなかったのは明らかである。語頭の

二重母音 (cf. OE Eoforwic > ON Jork = York) を除く強勢の推移も起こらなかった (§230)

Gordon のこの説は全面的に受け入れられることはできない。とくに (i) の「借用語として英語に取り入れられる」ということは文章語としての借用を意味しているに違いないが、口語借用と文語借用のあいだには少くとも一世代のズレ (lag) があったことも考慮に入れなければならない。言連鎖の中で十分に英語化されて、本来語と外来語の区別がつかなくなつてはじめて、借用語も文章語としての市民権を獲得すると考えるのが普通であろう。それゆえ文章の借用語が少くし前に起こつた言語変化 (ON における) の影響を受けていないからといって、口語にも影響がなかったとは言えないと思う。

Stevick は Gordon の説を論拠として当時の英語の二重母音に強勢の推移が起こらなかったことを主張しようとしている。前章の (又) では /he·o/ > /hō·/ > /so·/ を認めて、このばあいでも [h] が [ç] に近づく条件は残っていたらしいとも言っている。筆者は二重母音が上昇型にならないでどうして heo の子音が [ç], [s] に聞こえるのかわからない。heo が heo になつてはじめて [h] = [j] = [ç] > [s] が考えられるのではないかと思うのである。Stevick は /h/ の調音域が広いため多くの異音が許されることを理由にあげるだけで、なぜ /h/ がわざわざ安全域の際辺で [ç] として実現されなければならないのか、その理由ははっきりと述べていない。

Samuels の説にも一部に矛盾したところがある。彼の論文は she の起源を主題とするものでないことはすでに述べた。そのため彼は起源についてはごく簡単にふれるだけで、/h/ > /s/ の結果 she が生じたとしている。つまり heo (hie) > she は当然のこととして論を進めるのであるが、これは she の伝播の状況について彼が言っていることと矛盾してはいないか。she が南西方向へ進むにつれて Y 形は後退し、その後には一時的に

「ç」(çh)が残る、というのが彼の主張である。そのばあいも、変化の方向はç<çhであって、sh<shは考えられないであろう。しかし、そこにçがなければç<çhは起こらないわけで、この種のçh形が生じるためには、çの存在が前提である。shの攻勢が加わる時çはshの後衛に守られながら退脚すると言うことができよう。従って、最初はçから出発してçhとなりshとなったとする彼の前提には問題があると言わなければならない。

Sevickはçhがshの伝播の途中で副産物として生じる、ということには全然気付いていなかったようである。

四

以上で比較的近年に出た論文をやや詳細に検討した。Sevickの論文は前章の初めに述べたように周到に書かれてはいるのだが、理論にとらわれすぎたところがないだろうか。そのため現実を見失っているようにさえ思われるのである。

Samuelsは彼の論文の冒頭で、言語変化を言語内部の因果関係のみで説明しようとする傾向と、言語の変化は自然なものであるから説明の要はなく、ありのままを記述すればよいとする伝統的な態度に言及し、最近ではこの二つの研究態度をかね備えた論文が発表されるようになった、と喜んでいる。彼自身のSpoken ChainとSystemという二分法も、そのような研究態度のあらわれであろう。筆者はSamuelsのSpoken Chainの概念を頭において本稿の主題Metaphorについて考えてみた。以下にそれをまとめてみる。

北歐、とくにデンマーク方面からのヴァイキングたちが英国の東海岸をこぎ略し始めたのは九世紀の前半（八三二）であるが、同じ世紀の後半（八七六）には、彼らはヨークシャーの一角を占領してそこに定住した。それについて東中部地方一帯にもデンマーク人たちの植民地が出来始めた。一方西海岸に回ったノルウェー系のヴァイキングたちは、アイルランドその他西方の島々を根拠地としてイングランド西部の諸州に侵入し、今日のウェスモアランド、ランカシャー、西ヨークシャー等に定住したので、東アングリア地方からノーサムブリア全域が Danelaw（デン法施行地区）と呼ばれることになった。北歐人の移住は当初は軍事的占領であったが、すぐに土地の分配が行われ、彼ら独特の農法による農業に従事するようになったらしい。

この Danelaw の地域には現在でも *-by*, *-thorp* など北歐語で「村落」を意味する語尾のある地名 (Grimsby) が無数に残っていることから、定住者たちの分布や社会組織などを想像することができる。そうした北歐系の地名にまじって、それよりも古い本来の地名も多数残っているのは、原住民と移住民がすぐに親密な共同生活に入ったわけではないが、互いに交渉がないほど隔離してもいなかったことを示している。地名に含まれる北歐語の要素が音韻的にも形態的にも十分に英語化されていない場合があるのは、両者が一般に考えられるほど簡単に同化しなかった証拠であると言うことができよう。

しかし両民族の間に最初は多少の対立があったとしても、時がたち世代が変わった後まで同じ状態が続くとは到底考えられない。かりになんらかの違和感があったとしても、両者の日常的な交渉がなかったはずがないし、言語の接触もそれ相応にさかんであったものと想像される。

北歐語と英語が同族語であることは言うまでもないが、当時の段階では、現在われわれが想像する以上に近似したものであったらしく、北歐人と英国人がそれぞれ自国語を用いて話したとしても意思の疎通に事欠かない程

度であったのは、アイスランドのサガその他にいくつも証言がある。

E. Björkman は英⁸⁾国内での北歐語と英語の關係について、最初の一、二代のあいだは bilingual な状態が存在したこと、非常に近い同族語であるため、語いの貸借混用がほとんど無意識のうちになされたこと、語幹に注意が払われ、屈折は無視される傾向があったこと、一方で廃語になったものが他方で用いられているばあい、廃語が復活することも多かったこと等々、疑う余地のない説得力をもって述べている。

両國語の關係がこのようなものであったからこそ、他にあまり例のない、三人称複数代名詞の変化形の一揃い (they, their, them) をそっくり北歐語から借用することさえも起こりえたのである。また現代方言の中に語頭に *sc-*, *sk-* を持つ語が驚くほど多いことも、当時の両語の浅からぬ關係を物語っている。標準語と方言に共通なものを除いて、⁹⁾ 方言だけに残った *sc-*, *sk-* の語数は *English Dialect Dictionary* に収録されているだけでも、一、一五四あるという。もちろん *sc-* (*sk-*) 以外の北歐系の借用語で方言に残るものの総数は、どれだけあるかわからない。

以上のような状況の中で ON の *sjá* が直接借用されて一定の期間 ¹⁰⁾ Spoken Chain にだけ用いられ、やがてある方言の小体系の中に組み込まれて *Peterborough Chronicle* では *scæ* として現れると考えるのはきわめて自然なことではあるまいか。Scæ の母音の音価をこの方言の母音体系の中で考えるとき、なおさら *scæ* < *sjá* が真実味を持つようになるのである。

ゲルマン祖語から分れた各支派が独自の音韻変化を繰り返した結果、二つの支派間に互いに対応する母音の系列が生じるのであるが、そのような対応音の例として (OE) *eo:* (ON) *já* ¹¹⁾ をあげることができる。たとえば *deor* : *djarfr* (bold), *feond* : *fjándi* (enemy), *seofon* : *sjuu* (seven), *séon* : *sjá* (see), *helpan* : *hjálpa*

(help), heort: hjarta (heart) など、比較的の使用頻度の高い基本的な語にこの対が多い。これとほとんど同じ音価な (OE) eo: (ON) jó 対 — ceosan: kǰosa (choose), beodan: bjóða (offer), hleop: hljöp (leapt) など — を加えれば、リストはかなり大きなものになるはずである。この ON の二重母音の上昇化の傾向は、前章にあげた Gordon の説にもかかわらず、ON の方言の場合も考えると、十一世紀以前にははっきりと現れていたと思うのであるが、それが英国人たちの耳を強く打つものであったことは容易に想像できる。北歐人が sja (she) を発音するのを聞いた英国人はだれでも seo を連想し、両者が混交されて she の原形ができたと考えられることである。

やはり直接借用または混交を裏付けるものとして西中部地方の ho (= she) をあげることができる。Wright (§375) も Wylid (§303) も、これについてはかなり苦しい説明を加えているが、筆者はこれも ON の女性三人称代名詞 hon を直接借用したもので、その *o* が消失した形ではないかと思う。北部と北中部地方では弱強勢音節の *o* は早くから失われる傾向があった。この *Pearl* などによく用いられた ho は北西中部地方(チェスナー、ダービーシャー)の方言に現在も残る hu[ʉ:] (= she) の原形であることは、大方の学者の指摘するところである。

これと同じ母音を持つ sho (scho) は北部および北中部、西中部地方方言に広く見られる形であるが、Wright も考えたように、それは seo の異形 sjō から生じたとすべきであろう。そして *Ornumbum* などに現れる sho (scho) の伝播に際しての副産物と考えるのがよいと思う。

筆者は前章で、Samuels が she の起源は /h/ /</s/ としながら、伝播の途中では she がはじめにあって、その影響で 3 hē (/h/ /</) が生じるとした矛盾を指摘したのであるが、それは¹⁴⁾ hie /</ she のような発生

過程そのものまで否定するつもりではなかった。そういう変化が起こりえたことは、*Shetland* の説によるまでもなく、当時の英語（方言）の音素体系を考えるとわかるであろう。「ç」が /h/ の異音であったことは、OE 以来「h」にも「ç」にも *h* の綴字が用いられていたので明らかである。一方、方言によっては「ç」が /s/ の異音でもあったことが、フランス系の写字生の筆蹟と思われる写本のあちこちで「ç」の表記に *s* を用いていることからわかる。たとえば *rit* を *rist*, *mit* を *mist*, *dihre* を *diste* とした例が見受けられるが、これは /h/ の異音である。「ç」が /s/ の異音として受け取られた証拠である。「ç」は元来母音の後にしか生じない音であったが、ON の影響で二重母音が下降型から上昇型に変わったとき、*heo* は *heo*、すなわち「*hjo*」のように聞こえたはずであるし、「*hi*」はほとんど「ç」に等しかったはずである。こうして発生した語頭の「ç」は、方言によっては上記のように /s/ の異音になっていたくらいであるから、/h/ の異音であることをやめ、OE 以来の語頭の /s/ と合一したと考えられる。なおまた、当時 /sk/ から分離してはっきりと独立していた /s/ の吸引力が強かったことも忘れてはならない。

以上で筆者は *she* の起源について、一章にあげたほとんどすべての説を採択する結果になった。無原則に見えるかも知れないが、単一の起源を考えるよりも複数の発生過程を認めたほうが、はるかに現実に即し、矛盾がないと思うからである。

北欧からの移住者たちは、強力な統一国家の政策として英国に送り込まれたのではなく、むしろノルウェーやデンマークの豪族が部下の農民集団をひきいて、思い思いの地方に侵入して定住したと見るのが正しい。それらの集団は出身地はもちろん、侵入の時期もまちまちであったろうし、彼らの話す言葉も多数の方言に分かれていたものと思われる。彼らを迎えた英国人も、古くからそれぞれの地域に住みついた、さまざまな方言の話し手で

あったに違いない。

このような状況の中では、言語間の借用や影響の仕方もさまざまで、統一がなかったはずである。示差力があり範列（パラディム）内の秩序を乱さないような三人称単数女性代名詞を求める機能的な要請だけが、どの方言にも共通であったとする²⁾、各地域によってバラバラなやり方でその要請が満たされてもおかしくはないし、そうなるのが当然ではあるまいか。

ただし、上にあげたいくつかの she の起源のうち、ON の *sja* の借用、および *sja* と *seo* の混交、この二つが最も重要なもので、他の変化はそれらに刺激されながら、並行的に起こったものと筆者は考えたい。

Samuels が *she* 形の南西方向への伝播の途中で、各所に一時的に *scor* 形が発生したと言うのは事実のようである。二章で紹介したように Samuels は McIntosh と組んで Fit Theory を実践しながら、ME の諸作品の出所、年代を割り出す調査をやっているから、相当に詳しい資料の裏付けをもって上記の伝播説を発表したのだと思う。

試みに、手許にある Middle English Reader の類で、該当の地域、年代の作品数種を調べてみたのであるが、その範囲でも Samuels の論拠となった事実の輪郭がわかるように思った。

	文 献 名	出 所	年 代	三人称女性代名詞
(1)	Peterborough Chronicle	N. E. Midl	C. 1155	scœe
(2)	Genesis and Exodus	S. E. Midl	C. 1200—1250	she, sge • ge, ghe
(3)	Chaucer, Gower, etc.	S. E. Midl	C. 1380	she, sche
(4)	Returns of the London Guilds	S. E. Midl	1389	3he

(1) の作品を起点として考えらるゝ一五五年ごろ N. E. Midland (北東中部地方) にあつた /s/ が、約一〇〇年後には S. E. Midland (南東中部地方) へ南下し、きこじ /s/ と /ç/ の前線が出来ている。さらに一〇〇年と少こしたつて一三五〇〜一四〇〇年ごろには、Chaucer などの /s/ 形を用いているのだが、同じロンドンに /ç/ 形が発生してゐる。前線がここまで南下したと言へるべきであらう。

(1) G. T. Flom : The Origin of the Pronoun "She", JEGP, VII (1908), 115—25.

H. Lindqvist : On the Origin and History of the English Pronoun *she* *Anglia*, XLV (1921), 1—50
 Engen Dieth : *Hips*, A Geographical Contribution to the "she" Puzzle, *English Studies* xxxvi (1955), 209—217.

J. Vachek : Notes on the Phonological Development of the NE Pronoun *She*, *Brno Studies in English*, IV (1964), 21—9.

R. D. Stevick : The Morphemic Evolution of Middle English *she*, *English Studies* 45. 381—8 (1964).
 M. L. Samuels : The Role of Functional Selection in the History of English, *Transactions of The Philological Society* (1965).

- (2) 荒木一雄：文法的變化の要因—sheの起源再考。「英語青年」(一九七〇)八月号。
- (3) E. V. Gordon : An Introduction to Old Norse, p. 326 ff.
- (4) Charles Plummer : Two of the Saxon Chronicles Parallel, vol. II lxxx.
- (5) E. V. Gordon : *ibid.*
- (6) 一四世紀のChaucer, Gower などの時代となるゝこのスレは非常に小さくなるのだが。
- (7) F. M. Stenton : Anglo-Saxon England, p. 515.
- (8) E. Bjorkman : Scandinavian Loan-words in Middle English ; Introduction, *passim*.
- (9) Wright : An Elementary Middle English Grammar, §161.

- (10) Samuels が彼の論文(注1)で用いた意味で。
- (11) E. Prokosch : A Comparative Germanic Grammar, p.130 ff.
- (12) Wright : *ibid.* §247.
- (13) Wright : *ibid.* §375.
- (14) 日本の方言に見られるヒとシの混同も音素論的には同じプロセスのものとと思われるが、発生の範囲が全く違うので、ここでは比較を差し控える。
- (15) Wright : *ibid.* §17.